

【別紙】 令和7年度社会課題テーマ概要

テーマ		提案内容	担当課・係
A	災害に備えるデジタルデバイス対策	<p>【背景】 近年、自然災害が頻発する中で、迅速な情報収集と適切な避難行動が求められている。しかし、高齢者を中心に、スマートフォンやタブレットの操作に不慣れな層が多く、デジタル防災技術への対応が遅れている。国の「Society5.0」や地域防災力の強化を目指し、デジタル技術を活用して防災力の向上を図ることが急務である。地域住民が日常的にデジタル技術に触れ、災害時に正しく活用できる環境を整えるための支援が必要。</p> <p>【課題】 災害時に迅速に情報を得るためにはスマートフォンや防災アプリの利用が有効だが、特に高齢者の間で操作が難しいと感じる人が多く、災害時にデジタル機器を十分に活用できない現状がある。また、日常生活の中で防災アプリを使用する機会が少なく、緊急時に操作方法を思い出せないことが懸念されている。デジタル防災技術の習得をサポートし、緊急時に備えるための継続的な支援体制が必要とされている。</p> <p>【目指す姿】 <1st Step>災害時のデジタル機器の活用法を学ぶ場を提供する <2nd Step>地域防災訓練でのデジタル機器の使用を実践し、スキルの定着を図る <3rd Step>地域内で持続的にデジタル防災技術を共有・サポートできる体制を確立する 単に高齢者に対して機器の操作方法を教えるだけでなく、世代を超えた住民全体を対象に知識の向上や協働を促すことで防災時のデジタル活用を地域に広げ、住民間でデジタル防災技術を共有し合える持続的な体制を確立することを目指す。</p>	情報政策課 DX推進係
B	ツクリテによるまちの賑わい創出	<p>【背景】 ・市内には、約200名のツクリテが活動しているが、市民との出会いや交流の場が少ないため、市民にとってツクリテがまちや市民の暮らしから離れた存在であり、ツクリテに対する認知度も高くない。 ・来年度、瀬戸市のまちなかで開催される国際芸術祭「あいち2025」では、多くの人が瀬戸市を訪れることが予想され、アートやツクリテが果たす役割も重要視されている。 ・ツクリテがまちに在ることによって市民の価値観に影響を与えるなど、「市内に在るツクリテ活動の可能性」や「まちとツクリテの新しい関係性」を考えるための機会を創出する。</p> <p>【現状の課題】 ・市内におけるツクリテの活躍の場が限られており、「ツクリテとまち」「ツクリテと市民」との関係性を認識できる機会が少ない。 ・ツクリテがまちや市民に対してもたらす効果を市民、ツクリテ双方とも十分、認識されていない。 ・ツクリテ同士の連携や自発的な活動を促し、まちの賑わいやキャリア向上など、瀬戸市の将来を担う人材の確保及び育成の場の提供が足りていない。</p> <p>【目指す姿】 ・ツクリテが地域に与える価値（本質的、社会的、経済的）を「ツクリテとまち」「ツクリテと市民」との関係性を持ち、創造・想像することの価値を提供できるツクリテの人的資源を高めるとともに、人的資本として瀬戸のツクリテを市内外に発信し、まちの“多様性”や市民生活の“豊かさ”につながるなど、まちの新たな魅力を生み出す。 ・ツクリテの活動が瀬戸市の将来像の実現に向けて、原動力になりうる存在になること。</p>	ものづくり商業振興課 ものづくり係
C	外国人住民もまちづくりの担い手となる多文化共生のまちづくり	<p>【背景】 ・外国人住民の増加、多国籍化を受け、瀬戸市においても定住する外国人住民が増加しているが、今後は外国人住民もまちづくりの担い手として活躍できるような施策を、瀬戸市国際センターとともに推進していく。</p> <p>【現状の課題】 ・言葉の壁や文化の違いなどにより、日本人住民と外国人住民が交流したりコミュニケーションを図れる機会が少ないため、外国人住民が主体的に関われるようなまちづくりができていない。 ・瀬戸市国際センターの事業が日本人向けのものが多く、外国人住民を対象にしたものがない。</p> <p>【目指す姿】 ・今後の瀬戸市や瀬戸市国際センターの多文化共生に関する事業に主体的に関わることでできる外国人住民を集め、まちづくりの担い手となる人材として育成することを通して、誰もが活躍できるまちづくりを目指す。 ・育成した外国人住民が、自分たちの強みや外国人独自の視点を生かして自分たちのための国際センターの事業を考えたり、地域の外国人住民の中でのキーパーソンとなって行政と地域住民をつなぐ役割を担っていただけることを目指す。</p>	まちづくり協働課 協働第3係